



研究会で植えた漆の畑



佐治を再び「漆の里」へ

さ じ う る し
～ 佐治漆研究会 ～

社会人として大学入学をきっかけに

南北と西側を千メートル級の山並みに囲まれる鳥取市佐治町は、かつて日本でも有数の漆産地として知られていました。

漆芸家の橋谷田岩男さんは、25年前に佐治漆の存在を知り、さらに深く知りたい、学びたいと考えました。平成24年には、早稲田大学に社会人として入学し歴史学や文化人類学を専攻。「鳥取漆器と佐治漆の生産と流通の変遷」というテーマで調査研究を行い論文にまとめました。そのときに、佐治漆について佐治の漆掻きに関係する人たちにインタビューをしたり、県立図書館や県立博物館で文献を調べたりしたそう。佐治漆が途絶えて50年以上経ちますが、調べれば調べるほど、「佐治漆を復活したい！なんとかしなくては！」という気持ちになったといいます。そこで、佐治の住民にも声をかけて仲間を募り、平成28年10月に「佐治漆研究会」が発足しました。

現在、研究会のメンバーは6名。漆の栽培や子どもたちへの体験活動などさまざまな取組を展開しています。

佐治で、再び漆を栽培！

研究会で最初に取り組んだのは、佐治で漆を栽培すること。発足当時の会長だった山本達夫さんやまもとたつおの畑を借り、試行錯誤を繰り返しながら栽培に挑戦しています。

佐治では600年前から漆が栽培され、昭和40(1965)年頃まで漆掻きをしていました。「佐治で漆栽培が途絶えたとき、自分が育てた木をなんとか後世に残したいと考えた人がいて、知り合いに木を託したんですよ。その託された人が、私たちの同級生で」と田中さん。ほとんど枯れた状態だった木を研究会が引き取りました。この木で挿し木をして苗木を育て畑に植えることで、佐治漆は途絶えることなく引き継がれています。

天下第一品! 佐治漆

「天下第一品」といわれた佐治漆。県外の漆を研究する大学に橋谷田さんがDNA鑑定を依頼したところ、佐治漆は佐治の固有種であることがわかりました。さらに、成分分析をすると、漆の品質を決定する「ウルシオール」という成分が国産漆の中でもトップレベルの78.5パーセントも含まれていることがわかりました。

悩みは、鹿に食べられること

研究会では、挿し木だけでなく種を採り実生栽培も試みます。しかし、100粒まいても5つほどしか発芽しません。地元の造園会社にも協力してもらい、発芽率を高める努力をしていますが、漆の栽培はとても難しいそうです。

また、鹿の食害にも悩まされています。「せっかく育ってきた木が、鹿に食べられてしまって。資金不足で防獣柵を設置できないことが悔しい」と嘆く橋谷田さん。300本ほど植えた木が、今では150本に減少。鹿の食害により、栽培面積が増えないことが課題だといいます。

「活動の目的は、漆の木を増やし樹液を流通させ漆器を生産するなど、地場産業として発展させること」と谷口さん。「樹液が採れるようになるまでに15年以上かかる。廃園になった果樹園や荒れた田んぼに漆を植え、漆の木を増やしたい」と続けます。



漆を掻くようす



取材時にも鹿の足跡を発見！
防獣柵が設置できてないところは鹿の食害が…

以前は、「漆はかぶれるから怖い」と言われましたが、今ではだれも言いません。地域のみなさんが理解してくださるから私たちも活動ができます。

鹿の食害対策で頭が痛いなあ。漆の木を増やすことが今後の目標です。

私はもともと県外出身なので、地元の谷口さんと田中さんがいるから、佐治の地域に入っていける。本当にありがたい。



副会長／佐治の住民で歴史研究家
たなか よしお
田中 精夫 さん



会長／佐治の住民で元佐治村助役
たにぐち てるお
谷口 輝男 さん



事務局長／漆芸家
はしや だいわお
橋谷田岩男 さん

漆の新たな可能性

現在、和紙のコースターに漆で絵を描く工作など漆と和紙のコラボも考案中。体験型の観光は人気が高いため、観光資源としての漆の可能性に期待しています。

また、子どもたちへの普及啓発活動にも力を入れています。地元の小学校と中学校に出向き、佐治漆についての講座を開いたり、県立鳥取西高等学校に招かれ佐治漆について話をしたりしたことも。「佐治漆の研究で興味を持つ生徒がいて。昨年、公益社団法人日本地理学会の研究発表で生徒たちが佐治漆について発表し理事長賞を受賞しました」と、うれしそうに話す橋谷田さん。



子どもたちの漆箸塗体験の様子



鳥取西高等学校で佐治漆について話す橋谷田さん

活動を始めて6年が経過。苦労もあるが、手ごたえも感じています。「漆は塗料としてだけではなく、さまざまな可能性を秘めている」と田中さん。「樹液を掻いた痕がV字になっていてとても美しく、アート作品としてもおもしろい」とその魅力を話します。

もう1つは食材としての利用。韓国の家庭料理に、漆オックラフ鶏という漆の幹で出汁をとる料理があり、地域の人といっしょに漆鶏を作ってみんなで食べてみたそうです。「食べると、体がぼかぼかしてきて。漆は滋養強壯の食材にもなる」と、薬膳料理としての可能性も感じています。

佐治の未来のために

令和4年1月21日の鳥取市民大学では、橋谷田さんが講師となり佐治漆についての講座が開かれ、市民が「佐治漆」について知る機会となったそうです。「これからも、佐治漆のすばらしさを伝えていきたい」と話すメンバーの皆さん。

「今後の目標は、漆の木を育てること。本数を増やし、樹液を採れる状態にしたい」と意気込みます。

漆畑は、佐治アストロパークからさらに上ったところにあり、周りには田んぼが広がり、見晴らしのよい絶景となっています。この場所で、漆を掻く体験や漆の実で作ったロウソクに火を灯すなど、佐治漆の魅力を知ってもらう「佐治漆まつり」を企画中。「この絶景と漆の魅力を味わってほしい」と夢を語ります。五し^{*}の里に漆が加わり、六しの里になる日もそう遠くないかもしれない。

※「五し」とは

佐治地域の宝である「梨(なし)」「和紙(わし)」「話(はなし)」「石(いし)」「星(ほし)」のことを五つの「し」⇒「五し」と呼び、魅力ある地域資源としてPRしています。

日本有数の産地として知られた 佐治

佐治漆の起源は約600年前の室町時代で、本格的に漆の生産が始まったのは江戸時代といわれています。佐治では良質な漆がたくさんとれたことから、鳥取藩の財政を支えていました。また、樹液はおもに京阪神方面に送られ日本の伝統工芸を支えてきました。最盛期には、佐治全域で漆の木が5,000

本以上ありましたが、戦後は安価な化学塗料や中国産におされ、その中で昭和40年代に消滅しました。国産漆は今ではほとんど途絶え、98パーセントが中国産漆だそうです。

平成25年文化庁は、重要文化財の修復には国産漆を使用するよう指示しましたが、生産不足が深刻で増産が急務となっています。

メンバー募集中!

漆について学んでみたい方、興味のある方、私達と一緒に活動してみませんか？



ホームページ▶



フェイスブック▶



問合せ先

佐治漆研究会

〒689-1311
鳥取市佐治町野津376

TEL 0858-88-0949

URL <https://www.facebook.com/sajjurushi/>